素直になれない童貞はイケメン同僚にアナル拡張される

「敦の作る料理、本当美味しいな」

南山旭(みなみやまあさひ)は、目の前にあるアクアパッツァにフォークを伸ばした。

疲れている体に、素材の自然なうまみが滲みわたる。

「旭にそう言われると嬉しいよ。俺、ビール飲むけど旭も飲むか？」

気分を良くした北尾敦(きたおあつし)は、冷蔵庫に缶ビールを取りに行こうと立ち上がる。

「あぁ、酔わない程度に飲むよ」

ウエディングプランナーをしている旭は、担当していたお客様の結婚式が無事に終わり、その恒例のお疲れ会として同僚の敦の部屋で食事をしていた。

敦とはブライダルスクールで知り合って、もう七年の付き合いになる。
大学時代にバイトをしながらスクールに通っていた旭は、同じ境遇で同じ目標を持つ敦とすぐに打ち解けられた。
普段、考えすぎてしまうネガティブな思考の旭は、ポジティブな性格の敦に助けられる事が多く、就職活動の時は死にそうな顔をしていたところを何度も励ましてもらっていた。
無事に同じ式場に採用された時は、二人して抱き合って喜んだ。
それから、お互い一人暮らしをする様になると時々こうしてお互いの家に行って手料理をご馳走になったり泊まったりしている。
そうしているうちに、段々と旭は敦の事が好きになっていった。
しかし、敦は容姿端麗で社交的な為、交流範囲も広い。
恋人くらい居てもおかしくはないし、敦の恋愛対象に男性が含まれているのかも分からないため、ずっと告白せずにいたのだ。
そしてもし、今日恋人か気になる人がいるか聞いて居るのなら、この

不毛な恋を諦めてしまおうと思っていた。
ビールの缶を持ってきた敦に、お礼を言ってからプルタブを開ける。
目の前の料理と相俟って、アルコールを摂取する手がついつい進んでしまう。
「旭はいつも美味しそうに沢山食べてくれるから、作り甲斐があるよ」
「毎日でも食べたいくらい美味しいからな。あぁ、毎日のようにこの料理食べれる人が羨ましいな」
少し酔っていた事もあり、旭は普段は言えない本音を吐いた。
「旭だって毎日のように食べてるだろ」
料理を口に運びながら敦は目線を旭に向け、目尻を下げて微笑んだ。
長いまつ毛と茶色く透き通った目に、旭の心臓が高鳴ってしまう。
恥ずかしくなった旭は、目を逸らした。
(俺もって、やっぱり恋人いるのかな)
考えれば考えるほど、胸が苦しくなっていく。

旭はビールを一口飲み、覚悟を決めて敦に聞いた。
「なぁ、幸せってなんだと思う？」
いきなり恋人いるのかなんて聞いたら、気持ちに気づかれてしまうと思い遠回しに探る。
旭があまりに真剣な面持ちだったからか、敦は持っていたナイフとフォークを置き、手を止めた。
「なんだいきなり。何かあったのか？」
「大した事じゃないんだけど。俺さ、仕事も上手くいってるし結婚して幸せそうに喜ぶお客様の姿見てるだけで、幸せだと思ってたんだよ。でも……」
「ふぅん。旭も結婚してみたくなったのか」
敦が目の前で手を組む。表情は変わらないが、目が少しばかり涙ぐんでいる気がした。
（俺の結婚式を想像して感動で涙ぐんでるのかな？　本当いい奴だ）

「結婚ってより、恋人欲しいなって」
「気になる人はいるのか？」
「うん、まぁ……。敦はどうなんだよ」
自然に聞けた筈だと、旭は息を呑んでテーブルの下で拳を握りながら返答を待った。
答えがどうであれ、後悔はしないと決めている。
敦は、旭の方を真っ直ぐ見て答える。
「俺も気になる人ならいるけど」
旭は目を見開いた。全身から血の気が引いていく。
「そう」
自分でも、そっけない返事をしたと思った。
（聞かなきゃよかった）
倒れこみそうになり、胸の奥がザワザワする。気持ちに気づかれたくなくて目を逸らし、目の前にあったビールの残りを一気飲みした。

それを見ていた敦は、思い出したように言った。
「そういえば、新しく買ったワインあるんだった。飲むか？」
「飲む。でもこれ以上呑んだら帰れなくなるかもしれないな」
「明日休みだし、泊まっていけばいいだろ」
立ち上がって、冷蔵庫にワインを取りに行く。
敦の背中を見ながら、旭はもうどうなってしまってもいいと思っていた。
「分かった。お言葉に甘えて泊まらせてもらうよ」
「ついでに、食後のデザートにレモンシャーベットも食べるか？」
冷蔵庫を覗いていた敦が、振り返って聞いてくる。
「食べる。敦は本当、料理上手だな」
いつかこの料理も食べられなくなるのかと、胸をチクリとさせながら旭は笑顔で答えた。
敦は持ってきたワイングラスと白ワインのボトルを、慣れた手つきで

テーブルに並べると椅子に座る。
「旭の喜ぶ顔が見たいからさ。ほら、先ワイン飲もう」
敦はワインのコルクを開けると、グラスに注いだ。
目の前のワイングラスに映った自分の顔を眺めながら、旭は考え事をしていた。
敦が気になる人と付き合ったら、この自分が座っている席にその人が座るのだろうか。そして、敦と幸せそうにワインを飲んでキスしてそのままセックスとかするのだろう。
もしも、敦が気になる人と結婚したら、こういう風に二人きりでゆっくりお酒飲んだりもできなくなるのだろうか。
敦と自分以外の人が結ばれた時に、素直に祝える気がしない旭は、どうすればいいのか分からなかった。
「何ボケっとしてるんだ。ほら乾杯」
旭はハッとして敦の方を向いた。いつもと変わらない優しい表情をし

ていて安心するが、何も知らない敦に少し罪悪感で胸が痛む。
敦は目の前のワイングラスを持ち軽く上に上げて、旭のグラスに近づけた。
「あぁ。悪い。乾杯……って何に対して乾杯なんだ」
敦とまた目が合い、心臓が跳ねる。
「美味しい料理と二人の夜にとかどうだ？」
雄っ気の強い眼差しで見つめられ、旭の胸は高鳴るばかりだ。
（敦のこんな表情初めて見た。俺の事、からかってるのか？）
「二人の夜にって恋人じゃないんだから」
冗談言うなよと、旭は無理矢理笑った。
「そっか」
それにつられて敦も笑うと、二人同時にワイングラスに口を付けた。
「このワイン美味しいな」
旭はグラスに残っていたワインを、ジュースのように飲み干した。

「良かった。でも度数高いらしいから気をつけろよ」
敦は少しずつワインを口に含みながら、旭にやんわりと注意する。
「今日は泊まるし酔っても平気だろ。早く飲まないと敦の分まで飲んじゃうぞ」
旭は白ワインのボトルを持つと、ワイングラスに注いだ。
敦は呆れながらそれを見ている。
「全く、しょうがないな。どうなっても知らないからな」
「美味しい酒飲んでどうにかなるなら、俺は構わないけど」
敦に悟られないように嘘を言った。本当は、酒の力でも借りないと、どうにかなってしまいそうだった。
そして、明日になったら敦に対する思いを忘れてすごそうと決めていた。
注いだ白ワインを半分まで、一気に飲み干す。
こんな無茶な飲み方をしたのは初めてだなと思いながら、もう半分を

飲み干し、意識をもうろうとさせた。

「頭……痛っ……」

枕から頭を起こした旭は、あまりの痛さにおでこに手をやり塞ぎ込んだ。

絶え間なく襲ってくる鈍痛に、顔をしかめる。

こんなになるなら無茶な飲み方するんじゃなかったと、少し後悔した。

敦がベッドに運んでくれたのだろうか。また、迷惑をかけてしまったと旭は悔やむ。

こうやって二人で食事をするのも、今日で最後のつもりなのだから、いい思い出といえばそうなのだけれど――。

「えっ……!?」

ふと、下を向くと自分の上半身が裸である事に気づく。慌てて布団を捲ると、トランクス一枚しか穿いていない。
いったいなにがあって、今ベッドでこんな格好をしているのか。
まさかと思い、横を見ると敦が裸で寝ていた。
布団から少し出ている、健康な肌色の鍛えられているたくましい肩。色素の薄い茶色の髪の毛と長いまつ毛が、カーテンから差し込む朝日に照らされていて綺麗だ。
本当に寝ているのかと疑うほどに綺麗で、整った顔をして寝ているので、こんな状況だというのに見惚れてしまう。
「ま、まさか俺、敦の事襲った!?」
この状況は、そうとしか考えられない。
敦の事を襲ったのなら、ちゃんと責任を取らないと。
敦が気が済むまで謝らないといけないし、敦が自分の顔をもう見たくないというのならそうしよう。

旭は覚悟を決めて、敦の目が覚めるのを待った。
しばらくして、敦の瞼が薄らと開く。
いつもと変わらない、茶色く透き通った瞳が旭を見つめた。
「おはよう、旭」
「お、おはよう」
いざ、話すとなかなか本題を切り出せず、目をキョロキョロとさせるしか出来ない。
上半身を起き上がらせた敦は背伸びをしてから、昨日の事を思い出し笑った。
「昨日、大変だったんだぞ。旭ってあんな酔い方するんだな」
「大変だったって何がだ！？」
余裕のない旭は大声を出して敦に詰め寄った。敦は驚いて目を丸くした後、目線を上に向けた。
「そりゃ、まぁ、色々」

誤魔化そうと顔を逸らす敦を、旭は逃さなかった。
「俺、酔って敦の事襲ったんだろ。じゃなきゃこんな格好して寝てないし。お前はいい奴だから隠そうとしてくれてるのかもしれないけど俺は何があったのか知りたい。もし敦に何かしてしまったのなら気が済むまで謝る。この通りだ」
旭は呻くような声を出し、その場で正座をしてそのまま土下座をした。
慌てた敦はそれを止めさせようと、旭の肩に触って上体を起こそうとする。
「違うんだ、旭。本当に何もなかったから」
「二人してパンツ一枚で寝てて何もなかったはずないだろ。敦のアナルを傷物にした責任はちゃんと償うから」
「だから、何もなかったって言ってるだろ。裸なのはスーツが皺になるといけないから脱がしたら、旭がそのまま寝ちゃったからだし」
「じゃあなんで、敦まで裸なんだ？」

「暑かったから……」
旭は安心して全身の力が抜けた。同時に何故か目から涙が流れ出る。
「よかった。俺、敦のこと……」
泣きながら手で目を擦っている旭に、敦は近くにあったフェイスタオルを渡した。
「あのな。力なら旭より俺の方があるし、もし、襲われるにしても俺は挿れる方だろ」
敦は泣いている旭の頭を呆れながら、優しく撫でる。
「うっうっ、良かった」
何もなかった事に安心して、涙を拭くのに夢中になっていた旭は、敦が何を言ったのかあまり聞かずに、返事をした。
「それより、あんなに飲んで二日酔い大丈夫か？　お腹空いてるなら旭の好きな卵がゆ作るけど」
敦は、旭の頭を撫でていた手で頬を撫でながら、顔を覗き込んだ。

くすぐったくなった旭は、目を細める。
「わるいな。お粥作ってもらえるか？　二日酔いは少し頭痛いけど薬飲めば大丈夫だから」
諦めようと思ったのに、敦の優しさに心が揺らいでしまう。
「分かった。じゃあとりあえず着替えるか。いくら夏場でもパンツ一枚のままじゃあれだし」
言われて旭は、自分がパンツしか履いていない事を思い出し、少し恥ずかしくなって、持っていたフェイスタオルで肌を隠した。
「そうだな」
とりあえず、今日一日だけ敦と一緒に過ごしてから考えようと、旭は頬の温もりに浸った。

「薬ここおいとくからな。ちゃんと水分も取るんだぞ」
「ありがとう。お粥もごちそうさま」
頭の痛みが引いてきた旭は、卵がゆを完食出来るくらいには体調が良くなっていた。
器を片付けようと立ちあがろうとするが、それを敦に肩を掴まれ止められて驚く。
「俺が片付けるから、病人はソファでゆっくりしてな」
敦は微笑みながら水の入ったコップを旭の前に置き、器を持つとキッチンへと行ってしまった。
あんなに酔って迷惑をかけたのに、お粥を作って看病までしてくれる面倒見のいい敦を、旭はますます好きになっていた。
（諦めるって決めてたのにどうしよう……）
思い出せば、これだけ長く片思いしているのは敦が自分に甘すぎるからで、諦めようと思っても諦められないように流されてきたからだ。

言われた通りに薬を飲み、クッションを枕代わりにしてソファに寝っ転がった旭は、窓の外に目をやる。
綺麗な雲が流れている、穏やかな晴天だった。
夏休みに入っているのか、昼間から子供のはしゃぐ声が聞こえる。
ぼんやりしながら外を見ていると、洗い物を終えた敦が枕元に座った。
「具合どうだ？」
顔を覗き込まれながら上から見下ろされ、目が合い、胸がドキッと跳ねる。
昨日から敦と目が合ってばかりなのは、気のせいだろうか。
「敦のおかげで、大分良くなったよ」
「良かった。あんな飲み方する旭初めて見たから驚いたよ」
旭は、酔った自分が何をしたのかどうしても気になり、敦に聞く。
「ところで、酔って大変だったって俺、何かしたのか？」
敦の表情が、一瞬固まる。

やっぱり何かしてしまったのかと、旭が不安で顔を逸らすと、敦はため息を吐いてから口を開いた。
「あぁ、ずっとエロい話してた。これまで旭、全くそういう話しなかったから性欲あるんだってなんか感動したけど」
「え、エロい話……」
何もしてなくて良かったという安堵と、なんて話をしてしまったという恥ずかしさで、旭は間抜けな声を出してしまった。
「エロい話って具体的にどんな？」
心配になり、敦の顔を見ながら眉を下げる。
「おっぱいは筋肉質な方がいいとか、ちんぽはデカイ方がいいとか」
「お、俺そんな事！？」
予想していたよりもずっとエッチな事を言っていて、旭は恥ずかしさで手で顔を隠した。
穴があれば入りたい気分だ。

敦は、そんな旭を上から真剣な表情をしながら覗き込む。
「あぁ。ところで、ずっと男の体の話ばかりしてるから不思議に思ったけど、旭ってゲイなのか？」
「そっそれは……」
言ってしまってもいいはずなのに、いざ敦にカミングアウトするとなると旭は言葉に詰まってしまう。
敦は落ち着いた表情で、泣きそうな顔をしている旭の頭をゆっくり撫でながら口を開いた。
「その様子だとそうなんだな。大丈夫、俺もだから」
旭は、目に涙を浮かべた。
「そうだったのか……良かった……」
敦は、それを指の腹でそっと拭う。
「打ち明ける時、やっぱり心配になるよな」
「あぁ」

敦がゲイであったからと言って自分が付き合える訳ではないが、隠していた事を敦に言えて旭は心が晴れた気分だった。
「で、旭がもし酔った勢いで俺のアナル傷物にしたとして、俺が責任取って付き合えって言ったら付き合う気だったのか？」
頭に置いていた手を離し、真剣な表情をしながら敦は問う。
もしもの話だがちゃんと答えなければいけないと、旭は上体を起こして真剣に答えた。
「もちろん、その気だけど」
敦は息を吐きながら、旭と距離を縮めた。
「付き合うってどういう事か分かってるのか？」
顔を覗き込まれる。
目を合わせながら、息がかかる距離まで顔が近づいてきて、心臓がドキドキとうるさく鳴る。
「それくらい子供じゃないんだし分かってるよ。キスとかするって事だ

ろ」
からかってるのかと、旭は眉間に皺を寄せた。
「じゃあ……」
敦は旭の唇に指を置くと、さらに距離を詰めた。
何が起こったか分からない旭は、目を見開きながら敦を見つめる。
「俺とキス出来るって事か？」
一瞬にして、旭の体が火照った。
キスどころかセックスも敦となら出来てしまえるが、そんな事は恥ずかしすぎて言えない。
「まあ、出来なくはないけど」
これ以上、敦に至近距離で見つめられたらどうにかなってしまいそうで、目を逸らす。
敦に気持ちを伝えるせっかくのチャンスなのに、こんな時まで素直になれない自分に嫌気がさした。

「じゃあ」
唇から指が離され、今度は頬に手を置かれ更に顔が近くなる。
あまりの顔の近さに恥ずかしくなり、旭はぎゅっと目を固くつぶった。
敦の普段使っている柑橘系のシャンプーの香りが、鼻をくすぐる。
「試しにしてみるか？」
「えっまっ……んんっ……」
抵抗も虚しく、敦の柔らかい唇が自分の唇と重なる。
（どうしよう、俺、敦とキスしてる）
そっと目を開いて見ると、敦の目と合う。
雄っ気のある獲物を狙うような眼差しに、旭は下半身を熱くさせてしまった。
ずっと、敦とする事を妄想してオナニーをしていた旭だったが、それと比にならない快楽に戸惑う。
そっと唇を離され、息をする。

「どうだった？」
「嫌ではなかった」
　本当はとても気持ちが良かったが、そんな事を旭は言えなかった。
「良かった！　今度は舌入れてみていいか？」
「しっ！　舌って！！」
「恋人なら舌入れるキスくらいするだろ。旭はした事ないのか？」
「そのくらいある」
　本当は無いけれど意地を張った。二十四歳にして童貞でディープキスすらした事がないだなんて、引かれそうで言えない。しかも、その理由が敦に童貞をあげたいからだなんて、普通なら重すぎてドン引きしてしまうだろう。
「じゃあいいだろ」
　肩を押されて旭がふかふかのソファに倒れ込むと、なだれこむように敦が覆い被さってくる。

一瞬の事で、何が起きたか旭には分からなかった。
体ごとソファに押し付けられ、身動きが取れない。
敦はそのまま下唇をペロッと舌先で舐めた後、肉厚の長い舌を旭の唇に潜り込ませた。
「ん、んぅ……ん」
敦は旭の縮こまっている舌を引きずりだすと、舌を大胆に絡ませた。
（敦の舌、ぬるぬるして凄く熱い。上手く呼吸出来ないけと、体がすごくゾクゾクして頭ぽうっとする。ディープキスってこんなエッチなキスだったんだ）
舌を絡ませる度にくちゅ♡くちゅ♡といやらしい音が聞こえ、その度に体が嫌でも淫らに反応してしまう。
「んぅう……っ♡……はっ……ッ♡……んー♡んっ♡……んぁ♡」
（俺、敦と音立てて淫らなキスしちゃってる♡頭の中溶けちゃいそう♡）

歯列を舌先で丁寧にゆっくりなぞられ、上顎の裏を舐め上げられると快楽が体を走り抜け、ビクビクと反応してしまう。
「ん……っ♡っだ、駄目……っ♡敦っ……♡もうっ……♡」
「ッは……とろけそうなエロい顔して……だめじゃないだろ」
敦がこんな強引な奴だったとは。ロールキャベツ系男子とはこういう人をいうのか。
旭は抵抗しようと敦の体を押し退けるが、上手く力が入ってくれない。
「はぁ……素直になれない旭には……ちょっとお仕置きが必要だな」
「まっ……んんっ……♡だ……めぇ……♡」
強く舌を吸われ唾液を吸われると、じゅるじゅる♡とスケベな音が立つ。
「んんっ……♡はぁ……♡あふっ……♡あぁぁ……♡」
（こんな意識が飛んでイッちゃいそうなくらい気持ちいいキス♡まるで口でセックスしてるみたいだ♡）

ひとしきり口の中を犯されてから唇を離され、口角に垂れた涎を指の腹で拭われる。
「キスだけでこんないやらしい顔しちゃって。こんなエロいキスしたら、もう普通のキスじゃ物足りないだろ。ほら鏡見てみ」
そんなはずはないと、旭がテレビの横にある全身鏡を見ると、今まで見た事がないくらい顔を上気させて、エッチな表情をした自分が映っていた。
目を背けようとすると、顎に手を添えて顔を固定されてしまう。
「ちゃんと見なきゃダメだろ。キスだけでちんこもガチガチに硬くさせちゃって。これまで付き合った人にもこの顔見せたのか？」
「えっ……？　だめっ、敦っ……触っちゃ……ぁあ……っ♡」
敦の手が、スエット越しに旭の陰茎を摩った。
あんな気持ちのいいキスされて、勃たないわけないじゃないか。それより、このままだと自分は敦に誰にでもキスだけで勃起する淫乱だと思

われてしまう。それだけは避けなければ。
「どうなんだ？旭」
「セッ……セックスした事ない……」
上擦った声で訴えると、敦の目が驚いたように見開かれる。
顎に置いていた手が離され、旭は顔を正面に向けるが、敦の顔を見る事が出来なかった。
（とうとう言ってしまった。引かれてはいないだろうか）
何も言葉を発しない敦に、旭は不安になる。
「それって……童貞って事か？」
「それ以上は、恥ずかしいから聞くな」
敦の口からその言葉を言われると、顔から火が出そうなほど恥ずかしい。
「そうか……。俺は旭が童貞で良かったと思ってるよ」
「ちょっと何する……」

止める暇もなく、スエットを胸元まで捲られる。
「だって、このビンビンに膨らんでるピンク色の可愛い乳首、触るの俺が初めてだろ」
控えめな乳輪の乳首は、乳頭がぴくんと触って欲しそうに勃ってしまっていた。
「俺、旭の事好きなんだ。他の誰かに取られるなんて絶対に嫌だ」
両乳首を人差し指と親指でコリコリと摘み上げられ、攻められる。
「あっ……だめっ、敦っ……乳首……コリコリしちゃ……ぁあ……っ♡」
自分でオナニーの時に弄っている時とは全然違う刺激が、旭の胸の先を熱くさせる。
「旭の乳首可愛いな。未開発のピンク色の乳首、俺が沢山摘んだり弾いたり舐めしゃぶって乳首だけでイケる開発済みの敏感エロメス乳首にしてやるよ」

乳首をぎゅっと摘まれた後、指の腹でころころと転がされ、びんびんと弾かれる。
「やぁ、うぅ……♡メス乳首なんて……だめぇっ♡」
「でも、乳首はさっきより硬くなって俺にメスにして欲しそうだけど」
「ああ……っ♡違う……これは♡」
「違くないだろ。こんなに美味しそうにぷっくり熟れて、乳首沢山いじって敏感にして欲しいんだろ。分からないならまたお仕置きするよ」
敦の顔が胸元に行き、熱い息が乳首にかかったかと思うと乳首の先っぽをペロッと舐められる。
「だめぇ……っ♡乳首いじめないでぇ♡」
「まだ、分かってないのか？　旭の乳首は俺にいじめて気持ち良くして欲しいんだって」
熱い舌全体を使って、びちゃびちゃと音を立てて乳首全体を舐め回されてから、ちゅうちゅうと遠慮なく吸われる。

「あぁ……♡そんなエッチな舐め方らめぇ♡」
「旭の乳首、美味しいな。寝てる間に何度も舐めたくなって耐えたけど、もう我慢しなくていいな」
「そんなに舐めたら敏感になっちゃうから♡もうだめだって♡」
「そうか。右乳首ばっかり可愛がってたら、片方だけ敏感になって左乳首が可哀想だな。左乳首は爪先で先っぽカリカリしような」
右乳首をちゅうちゅうと吸われながら、左乳首の乳頭の先っぽを爪先でカリカリされると、気持ちよさで腰が浮いてしまった。
（らめだ♡乳首気持ち良すぎて馬鹿になっちゃいそう♡）
「あっ♡あっ♡気持ちいぃ♡敏感になってもいいからもっと乳首吸っていじめて♡」
「旭、やっと素直に言えたな。そういえば、旭が酔った時に大きくて太くて硬いちんぽが好きだって言ってたけど、俺のちんぽ好みに合うかな」

ズボン越しに、敦の熱くて硬くてデカいちんぽと、旭のちんこが擦り合わさる。
先走りの液で、パンツはもうぐちゃぐちゃに濡れていた。
「あ、敦のちんぽ凄く熱くて大きくて硬くて太い……」
「どうだ？　俺のちんぽ。旭のアナルに合いそうか？　旭の初めてを俺にくれるならアナルがケツマンコになるまで、何回も俺の硬いちんぽでかき回してやれるけど」
「あ、敦の熱くて硬いデカチンポで俺のアナルを……」
「そう、俺の形になるまで奥まで沢山ズボズボして何度もかき回してやる」
ずっとオナニーする時に指を入れながら、敦のちんぽで奥をかき回されてイカされることを想像していた旭は、アナルをヒクつかせた。
「旭のちんぽさっきより硬くなってるけど、想像しちゃったか？アナルもキュンキュンしてるだろ。やらしいな」

（不味い、ちゃんと好きだって言わないと、自分が敦のデカイちんぽが好きで付き合った、ビッチだと思われてしまう。敦は気にしてないみたいだけれど、俺はそれじゃ困る）

「うぅ……だって俺もずっと敦の事」

「俺の事が、何？」